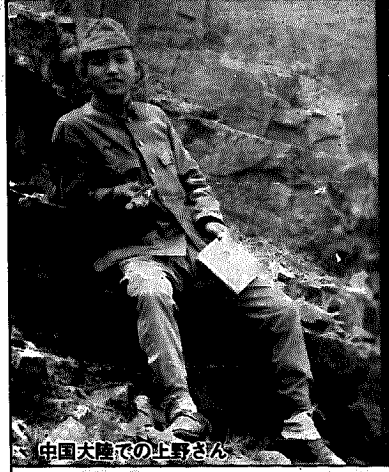
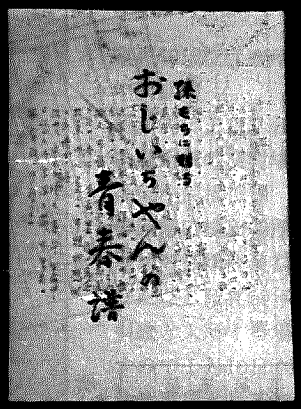


中国大陸での上野さん



A5判130ページ 1,200円

戦争体験をつづった上野さん

◉連載⑭

マイウェイ

「孫たちに伝えたい。戦争の苦しみ、悲しみを」

上野　久平

大正六年生まれ。大野五区で上野えこや商店を経営。このほど戦争体験をつづった「おじいちゃんの青春譜」を出版

登場してくださる人を募集

戦争は決して遠い外国や過去、テレビや小説の中にだけあるものではない。今もすぐ身近にある。例えば隣のおじいさんは銃を持ったのかもしれないし、おばあさんは防空壕で震えていたのかもしれない。

「孫たちに贈る、おじいちゃんの青春譜」を十一月に自費出版した上野久平さんもその一人だ。

「戦争を体験した一人として書かなければならないと思いました。子供には聞かせてやれたんですが、孫には話してやれません。今の子供たちになんとか戦争の苦しみを知ってもらいたいと思ったのです」

文章なんて書いたことがないという上野さんがペンを持ったのは二年前。家族が寝静まった夜、十一時ごろから二時ごろまで机に向かった。

「家内も知らなかったぐらいです。どうにかこうにか原稿用紙に書きました。途中で中断したこともあったんですが、約一千枚ほどになりました」

上野さんは昭和十三年末、二十二歳のとき出征した。十六年六月に帰国するまで北支(中国北東部)で鉄道警備、宣撫班（宣伝工作）に携わった。戦闘、自殺、誤殺、処刑、脱走、捕虜、戦死、まぎれもない戦争を見た。帰国後、黒埼青年学校に指導員として奉職。二十年五月に再び召集され新発田市（陸軍の部隊があった）で八月十五日を迎えた。

「戦場はニュースで知ったのと実際に自分の目で見た現実とでは全然違ってました。上海の街はがれきの山でした。生き残れそうもないと思いましたし、銃弾が飛んでくると震えていました」

本には上野さんが体験したことが日記風に書かれてある。戦場で克明に日記をつけていたのだ。この日記は帰国のとき検閲を恐れて焼き捨てたが、写真好きの上野さんはアルバム二冊分の写真を撮っていた。

「写真を見ながら書きました。でも思い出しながらというわけではありません。忘れることができなかったんです」

書こうか書くまいか迷った話も多かったというが、遺族や関係者に迷惑がかからないものは実名で書いた。慰安婦のことも書いた。記憶を忠実に再現することに努めた。表紙には遺族からきた礼状をそのまま使っている。

「事実を知ってもらいたいんです。戦争が風化し美化されがちです。天皇陛下万歳なんて言いませんでした。お母さんと言って死んでいきました。これが事実です」

続けて言う。

「怖いのは慣れです。だんだんと血や死体が当たり前に見えてくる。一度敵兵とばったり向かい合いました。お互いに撃てば殺せるんですができないんです。殺せないのが当たり前なんです」

何回ももうだめだと思ったという。戦争で貴重な青春を失った上野さん。二度と子供たちに戦争を味わせてはならない一心で書いた。

「わたしの青春は無だったけれど、この本を孫たちが読み戦争の怖さを知ってもらえれば、無が有になると思うんです」

お孫さんは七人。小学校四年生が最年長だが、大きくなればきっと読んでくれるだろう。おじいちゃんの青春譜はA5判百三十ページ。町外の小中学校からも注文がきている。希望者には千二百円で分ける。連絡先は大野五区☎7－2052。限定出版のため連絡はお早目に。

編集室から

農業は曲がっても曲がっても曲がり角では？　と考えてしまいますが、いくつめかのコーナーを曲がってみたら野菜畑が見えてきたようです。わが町の野菜畑は、果たしてよい作物がとれるのか、販路があるのか、利益は上がるのか、などを考えてみました。また、農村に限ったことではありませんが、婦人の役割はますます大きくなると思います。

とかく黒埼町の農業は米、農村は男中心社会と思われがちですが、野菜と女性、いわば脇役にスポットを当ててみたかったのです。十月号、十一月号、今月号とかなり農業関係を取り上げましたが、「農業はほんとうにむづかしい。でも可能性は大きい」が編集子の実感です。

今号、農業新時代に紙面を割いたため「黒埼町の今昔」「一人で話してみれば」を休載させていただきました。ご了承ください。今年も今号でおしまい。一年間のご愛読ありがとうございました。

今月の表紙

野菜集出荷貯蔵施設には毎日農家から野菜が運び込まれています。ブロッコリー、ねぎ、キャベツ…。こんなにたくさん野菜を作っているのかと驚くぐらいです。しかもきれいに箱詰めされて。「うちで作った野菜が東京のスーパーに並ぶなんて、時代が変わったんだわ」とある婦人が言っていました。集出荷場から全国に黒埼の野菜が送られるのも夢ではないのかもしれません。